清流通信
四万十川物語
Shimantogawa Monogatari
第 174 章 通信日 ● 2011年 4月 25日

〈送信者〉
財団法人 四万十川財団
TEL：0880-29-0200
FAX：0880-29-0201
E-mail: office@shimanto.or.jp
URL:http://www.shimanto.or.jp

山また山。深き山ありて、清き水あり。 四万十町十和

清流通信読者の皆様こんにちは。 今回は四万十町十和から、有機農業に取り組む大村和志さんについてお伝えします。

山々が萌葱色に染まる４月中旬の四万十町十和。四万十川の川幅いっぱいに渡された色とりどりのこいのぼり 500 匹が、川面を渡る風の中を泳ぐ。
今では全国に広がった“こいのぼりの川渡し”は、ここ四万十町十和が発祥の地だ。
その十和地区に、有機農業をしながらグラフィックデザインの仕事をする、大村和志さんを訪ねた。

2010 年四万十町展ポスター（制作：大村和志）

菜の花にとまる日本ミツバチ。
「これうちの子です。可愛い顔してますよ。」

有機農業 と 四万十川との 出会い

1964 年、大阪市生まれの大村さんは、子どもの頃から“大人社会”への不満を持っていたという。 “将来は、世の中に対し言いたいことを自由に表現できる仕事がしたい”と美大に進学し、グラフィック・デザイナーの職に就いた。しかし、経済活動としての現実の仕事の大半は、新しい商品を魅力的に紹介することで、今持っている“使えるモノ”を捨てさせることが目的。「何か違う･･･俺、なりたくなかった大人になってしまってる」悶々とする日々。

彼は迷った末、28 歳で退職した。 そして、ずっと考え続けてきた環境問題と正面から向き合うためにも、次の世代のためにも、「なろうと思った大人」になり直すためにも、在職中から密かに学習していた有機農業を始めた。

1992 年、大村さんはこうして、その頃住んでいた神戸市西部の農村地帯で、小さな農地を借りて有機農産物の生産と近隣住宅地への宅配を始めつつ、兵庫県内でまとまった農地を借りて、本格的にやっていこうと考えていた。

しかし、そう易々と事は運ばない。農地を借りられない、買えない、住ませてもらえない･･･。「兵庫県は大都市に近いので、山も農地も金づるなのです。高速道路、ゴルフ場、道路拡張･･･。金になるのを待っている状態。どこの集落も排他的で農地に対する考え方が不動産屋顔負け。農政担当の行政が入っても門前払いの連続。結局、８年間足踏みしてしまいました。」

その８年の間には、あの阪神淡路大震災もあった。大村さん自身も被災し半年間救援活動にも携わった。「農村には水も火も食料もある。すなわち、農村はライフラインそのものである。災害にも不況にも強い。都市部と同じ震度を経験したにもかかわらず、立ち直りが圧倒的に早い」これまでの自分の考えが間違いでないことを確信し、新たな展開を模索し始める。

農業を始めて７年目。 所属していた“自給をすすめる百姓たち”の会合で、高知県から参加した畑俊八さんと運命的な出会いをする。彼から四万十町への移住を勧められた。「新規就農する場合、無理矢理入り込むよりも、過疎地に歓迎されて入る方が精神的にも良いと思いました。またその頃、子供も生まれたので、日本一（と思われる？）の自然環境のなかで成長期を過ごさせたかったのもあります。」
こうして、大村さんは十和村（現四万十町十和）に移住した。2000 年のことだ。

川

「四万十川」と言ったって、
ここでは生まれたときから
そこにあるただの川。
それがたまたま四万十川だっただけ。
鮎やらウナギやらえびやら、
魚がいっぱいいて、
それを捕って食べる。
夏は暑いからそこで泳ぐ。
暮らしのなかにしっかり
組み込まれている。
きっと、そういうところが
豊かなんだろうなぁ。
でも、ぼやぼやしていると、
この豊かさを失ってしまう。
そんな時代。

十和村グリーンツーリズム研究会パンフレットより
（制作：大村和志）

四万十川に思うこと

見ず知らずの土地、四万十にやってきて１０年以上経った。

「昔の四万十川を知っている人から聞くその清流ぶりはすごい！そして全ての人が四万十川の水質悪化を嘆いています。でも、四万十川は汚れたのではなく，汚したのだという自覚が大切なんだろうと思います。 ただ、間違いなく言えることは“じゅうぶん再生可能な川”であるということ。都市部にある、これはもはや川とは呼べないようなモノではないということ。可能性があるんです。それはなぜか？流域住民が努力しているからか？ 違います。それは僻地にあるからです。ただそれだけです。それではいけない。今やこんな田舎でも都市の人と同じように合成洗剤じゃぶじゃぶの生活をしている。四万十川がなんとか踏みとどまっているのは、決して住民の努力ではない。単に人が少ないからです。人口が増えてもキレイな川であるためにはどうすればよいかをちゃんと考えて行動するべきです。ついでに、川の水質調査をする時に、サンプリング調査も必要だけれど、どちらかと言うと、もっと感覚的なものを重要視した方がいい。川を見て、水と戯れて、それではっきり分かる“清流”でないと意味がないですから。」

「四万十川は地球環境問題の象徴であり、社会システムの歪みの象徴です。四万十川再生のプロセスは、そのまんま地球再生のためのプロセスになるのではないか。だからここに住んでいるとかいないとか、そんなこと関係なくできるだけたくさんの人たちと手をつないで、思いをつなげ、この川を軸に地球を再生していきたい。」

彼にとって四万十川の問題は、そのまま自分自身への問いかけなのだ。

有機農業という仕事を通じて

「年間作っているものは、なばな・エンドウ豆類・丸おくら・ショウガがメインです。当たり前ですが、化学肥料も農薬も一切使いません。生物全てはできるだけ自然な環境で生きていくことが大切だと思います。いくら農薬を使っていなくたって，化学肥料を使っている野菜は間違いなくまずい。化学肥料って，人間界で言うと点滴みたいなもんです。人間も、点滴だけで生きていくことも可能なわけですが，でもやっぱりメシを食って生きている人のほうが元気ですよね。有機農業ってそういうことなんじゃないかと思います。僕たちの作る野菜は、余計なモノを与えて無理矢理大きくしていない。その植物が元々持っている生命力を尊重しているだけです。だからおいしいのだと思います。でもそのための手間暇は、半端じゃないですけどね。そんなこんなで世の中に伝えたいことは山ほどありますわ。」

大村さんはデザインにしても有機農業にしてもメッセージを運んでいる。

一つ一つの言葉をかみしめるよう、自らを鼓舞するかのように語る大村さんの、いつの時も自分が“当事者”であろうとする生き方は、言うは易く行なうは難しだ。

「そして、なんでもそうですが、努力をすること、真実を知ること。それは自分を責めることも含まれる。そして学ぶことと、変わることを恐れない。これが大事。僕はそうありたい。」

お目にかかる前、大村さん制作の印刷物を最初に拝見したとき、その中に“詩”を感じた私は、浅はかにも、宮沢賢治のような人物をかってに思い描いた。岩手の詩人のように“無口に農作業を続ける人”と思い込んでいたのだ。しかしだ。「体育の先生ですか？って、よく言われます。」と言う彼は、40 歳で柔道を始め二段までとったという腕前。見た目にも“ツワモノ”であった。そんな彼が、「お花畑は僕には似合わない」と笑いながら、彼が畑から摘んで帰り際におみやげにくれた“白菜の花”。 「白菜の花はおいしいんです」その言葉通りに、さっと茹でただけのその花は、春の香が漂って、この上ないごちそうだった。そしてやっぱり、あの詩のフレーズが頭に浮かんできた。

「雨ニモマケズ、風ニモマケズ・・・、サウイフモノニ、ワタシハナリタイ」